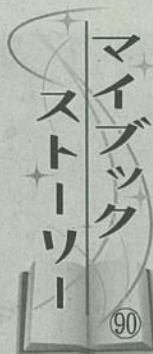


読むほん



三浦 文恵



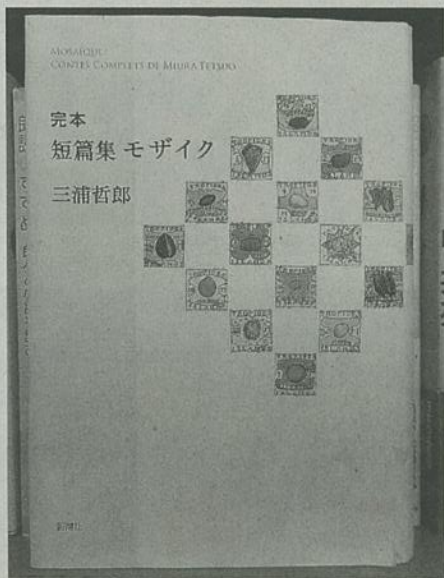
これほどまでにページをめくった本は他にない。三浦哲郎著「完本 短篇集モザイク」（新潮社）。それは、地元八戸出身作家の著作だからという以上に、彼の短編が実に「音にしやすい」からである。

20年ほど前に読み聞かせ団体を立ち上げたのは、父の葬儀で再会した父の同僚の国語教諭による一言だった。「お父さんの意志と一緒に受け継ごう」。『子供たちの声があふれる学校作り』を目指していた音楽教員の父は合唱指導、その国語教諭は音読を推進していた。私が民放局でニュー

スを読むようになった時、共に喜んでくれた二人。退職し、当時フリーになっていた私は、その場で団体設立に同意。ところが、三浦哲郎著の短編な

三浦哲郎著

「完本 短篇集モザイク」



三浦さんが選んだ「完本 短篇集モザイク」

短編の名手 朗読してこそ

のだ。

一尾の鮎あなづなのようなすっきりとした文体で知られる短編の名手・三浦哲郎の文章は、声に出して読むとその意図がよくわかる。文学作品は普通、音読される事を意識して書かれてはいないと思うが、氏の短編には心地よいリズムがあつてスラスラ読め、うまく朗読できたような気にさせられるのだ。

短編集の「じねんじょ」は、同じ三浦姓の私が三浦作品をよく朗読していたのが縁で加入した、三浦哲郎文学顕彰協議会の主催事業「三浦文学の集い」で朗読した最初の作品である。死んだと思っていた父親に会いに行く娘の話で、作品に登場する再会の店など、三浦氏の生家近くに住む私にも

懐かしい。

音読向きの三浦作品だが、読みにくい部分もある。方言が出てくる会話文だ。朗読者にとって永遠の課題とも言える会話文の表現だが、登場人物の話す方言がどうもしっくりこない。八戸人の設定でも純粹な南部弁ではなく、標準語っぽく書かれていたりする。これは私の勝手な憶測だが、中央文壇を意識して執筆していた三浦氏は、方言の「音」よりも意味合いを優先したのではないか。

今となつては本人に聞く術もないが、方言のせりふに悩みつつも、次はどれを読もうかと、今日もページを開いてみる。（八戸学院大学短期大学部教授 川口 ユニケイ ショーン論、八戸市）